

白神ねぎ

○長ねぎ栽培について

今年は気温と湿度が非常に高く推移し、軟腐病や白絹病が発生しやすくなっています。

例年だと8月下旬から9月上旬にかけて残暑(猛暑)があるので早期防除に努めましょう!!

〈軟腐病〉

夏季の高温で多発。例年発生が見られる圃場では特に被害が心配される。

白絹病やネギアザミウマの傷口から軟腐病が感染する場合もあるので注意。

夏ねぎ：収穫間際であれば、スターナ水和(収-7日)、

ヨネポン水和(収-7日)、Zボルドー(収-)など

秋冬ねぎ：オリゼメート粒剤(収-30日)、スターナ水和、ヨネポン水和、Zボルドーなど

〈白絹病〉

地際の茎の周辺にクモの糸状の菌糸あり。茶褐色のツブツブ状が菌核。

25~30℃の高温、湿度が高い状態が続くと発生しやすい。土寄せ後に株元散布。

モンカット粒(収-30日)、モンガリット粒(収-14日)、ロブラール水和(灌注、収-14日)など

※また、気温が高いことで、ネギアザミウマの発生が多くなっています。

病害と併せて防除を行いましょう。

白神山うど

○8月下旬以降は台風対策を万全に

① 高温多湿状態で株が枯れ上がります。

速やかに地表排水が行われるよう、明渠を掘ったり、排水路の点検を行ってください。

この時期に湿害にあった圃場の株は、伏せ込み後、腐りやすくなったり、揃いが悪くなるので排水対策はしっかり行って下さい。

② 強風による倒伏が考えられます。

摘心をまだ実施していないほ場のうち、茎長が1mを

大きく超え、倒伏が心配される場合は摘心を実施してください。

ただし、摘心が遅れると2次生長するおそれがあるため、8月下旬までには摘心して下さい。

倒伏すると、茎の刈り取り作業がしづらくなったり、新芽が動いたり、伏せ込み時に手間がかかります。

③ 株が倒伏した場合は、引き起こしを行わないでください。

株の引き起こしにより再度株が動く、新芽がさらに動いてしまいますので、注意してください。

※8月下旬以降の湿害、強風被害は収量に大きく影響します。万全な対策をお願いします。

白神みょうが

○みょうが栽培について

〈根茎腐敗病防除について〉

まだ収穫していないほ場では、収穫3日前までに使用できるランマンフロアブル500倍又は、オラクル顆粒水和剤2,000倍を3ℓ/m²(3,000ℓ/10a)使用して下さい。

〈収穫時の注意点について〉

・きれいに水洗いした後、水切りをしっかりと行い、柄を2cm以内に切りそろえて、切り口を乾燥させる。

・パックで出荷する場合には、1本6g以上のものを太さを揃え、1パック当たり60gで出荷する。

・極端に色沢の悪い物、細い物、切り口が変色したものは出荷しない。

アスパラガス

○アスパラガス栽培について

先月まで湿度が高かったため、茎枯病や斑点病の発生が見られます。

茎枯病に対しては、ロブラール水和剤を2,000倍にして散布してください。

また斑点病に対しては、ラリー水和剤を4,000倍にして散布してください。

両方の発生が見られる場合はアフエットフロアブルを2,000倍にして散布してください。

合わせてネギアザミウマが出てくるじきになりますので、リーフガード顆粒水和剤やコルト顆粒水和剤の散布も行っていきましょう。

白神きゃべつ

○きゃべつ栽培について

8月中旬から8月下旬には、S646を10aあたり20kg追肥し、軽く中耕しましょう。生育が悪い場合は、30kg追肥しましょう。外葉が小さいと収量が落ちるため、外葉を大きくするよう追肥は必ず行いましょう。

8月中旬以降は、定植前に使用したプレバソンフロアブル5等の効果が薄れてくるので、フェニックス顆粒水和剤により害虫防除をしましょう。また、病気の発生も懸念さ

れるため、フェニックス顆粒水和剤と一緒に、バリダシン液剤5を混用して、散布しましょう。

9月上旬から9月中旬には、結球始期になるため、NK23号を10aあたり20kgを追肥しましょう。

9月上旬以降には、再度、害虫防除をしましょう。病気に関しては発生を見ながら防除しましょう。このころの薬剤は前日まで使える薬剤を使用しましょう。それ以外の薬剤を散布すると、収穫適期を逃してしまう場合があるので使用時期には特に注意しましょう。

畝間・株間の除草は徹底しましょう。

【登熟の向上を図る水管理】

○登熟の向上を図るため、出穂30日後までは間断かん水を実施し、土壌水分を保持しながら稲体の活力を維持することが重要です。特に、開花後25日間は米粒が肥大するため、土壌水分が不足しないように注意します。

○最高気温が30℃以上になる日は、用水を確保できる地域ではかけ流しかん水を行い、地温を下げ根の機能減退を防止します。また、フェーン現象等で乾燥した風が強い日は湛水状態を保ち、蒸散による稲体の消耗を軽減します。

○落水時期は、出穂30日後頃を目安としますが、稲の登熟度やほ場の作業性等を考慮してください。落水時期が早すぎると、根の機能が低下し登熟が妨げられるため、低温や日照不足により登熟が緩慢な場合や、生育が旺盛な場合は、落水時期を遅らせてください。

★カドミウム含有米の発生が懸念される地域では、**出穂期3週間後まで湛水管理を厳守**し、カドミウムの吸収を抑制してください。

【斑点米カメムシ類の防除対策】

○水田内に出穂したカヤツリグサ科雑草(ホタルイ等)やノビエが発生しているほ場、イネ科雑草が主体の牧草地や休耕田等の発生源に隣接しているほ場では、斑点米被害軽減のため、出穂期24日後頃にキラップ剤を必ず散布するようにしてください。

○近隣に水稻以外の作物(野菜等)がある場合や養蜂業者がいる場合は、薬剤散布前に情報交換を密にし、散布作業を実施してください。

○飼料用米についても、主食用米同様に防除を徹底してください。

○稲の収穫2週間前までは、草刈りを行わないでください。

【刈取適期の判断】

刈取適期は、品種や栽培方法によって異なります。出穂後日数や積算気温を参考に、籾の熟色をよく観察して総合的に判断しましょう。

【刈取適期の判定基準】

① 籾の熟色

葉や穂首が緑色であっても籾の黄化程度が90%(黄色+黄白色の籾数の割合)の頃
※熟度の進展は緑(青)色→黄色→黄白色と進む

② 出穂後の日数

早生種(あきたこまち等): 出穂後45日頃
中晩生種(めんこいな・ゆめおぼこ等): 出穂後50日頃

③ 出穂後の積算気温(出穂期翌日から日平均気温を積算した値)

早生種: 950~1050℃
(1100℃を超えると胴割粒増加)
中晩生種: 1050~1150℃
(1200℃を超えると胴割粒増加)

令和3年産米のJAあきた白神における必須銘柄及び選択銘柄一覧表

令和3年産米の銘柄検査は、下記の品種になります

種 類	必須銘柄	選択銘柄
水稻うるちもみ 水稻うるち玄米 (18品種)	あきたこまち	サ サ ニ シ キ
	ひとめぼれ	は え ぬ き
	めんこいな	ゆ め お ぼ こ
		た か ね み の り
		萌 え み の り
		コ シ ヒ カ リ
		淡 雪 こ ま ち
		秋 田 6 3 号
		五 百 川
		つ ぶ ぞ ろ い
水稻もち玄米 (2品種)	きぬのはだ	
	たつこもち	
醸造用玄米 (8品種)	秋田酒こまち	華 吹 雪
	秋 の 精	美 郷 錦
	吟 の 精	一 穂 積
	美 山 錦	百 田